特42
444

氷室
墨畧
芭蕉
百萬
舟弁蓼

十六

255
.92

江戸到

水宮

鴻

明治
40 10 3
内交

大君のみ文

去ぬ長閑き　梅見

八雲山院より使へる侍下也

我世度毋ぼ世ぬ扱世代戸み

まゐり既よび向道ゐまゝバ是

より若桜路よりの清田の
八江青柴後瀬の山をもて
見つゝ京よりの都より帰るぞ
やとなるの花のうらの白玉桂
かなせ絵てゝ緑なる宮
るまやぞ雲の山ぐ

ぞ柴の木陰かくて雲路の
もとの宿も都より迎き
母波路や氷室山みも高なを
りく
氷室山に付ては此可其人を
まち氷室のいたれるも妻君

げやとなひ

一セイ　氷室守ぎも未

こころこえ　又

ふる雪や花の宣ゆ菓も雪

又　こうこ

深谷よ宣る松陰やがのきて

ツ　ア　こえ　又　こうこ　ア　こえ　こうこ

中上　こうミ　サシ

きと鶯ひ〻す〻し一花

中上　こうこ　ケ

ひ〻きぬまじ大下ハ皆生るれ

ど〻も松ハ常盤ぬきそへて

二ハ　緑よつ〻ゆ氷室ゆの谷ハ

ア　こうこ　ア

ま〻ず音さえて。氷よ残る氷

こうこ　こうこ　こうこ　ア　こうこ　ア

二中こえ　こうこ　こうこ

旨れ白も静よ宣ゆ。宣

こうこ　こうこ　こうこ　こうこ　こうこ　こうこ

豊年ぞぞ世る御代の御

ト　こえ　こうこ　こうこ　こうこ　ア　こうこ　ア　こうこ　ア　こうこ

の道もすぐ風ゆ

こうこ　こうこ　こうこ　こうこ　こうこ　こうこ　こうこ　こうこ

ふよ栄ゆ年のよも

こうこ　こうこ　こうこ　こうこ　こうこ　こうこ　こうこ　こうこ　こうこ　こうこ

を

ツトアツニ　ウエ　ヒ

遠かりき　かつぬやぴもろ

ヤウ　ヤウ　ウ

乃山は深み　ぐりぐり　きれ氣

ニ　ツ　ウ　ウ　ウ

いなれば在可をてるすふ今
りでめも物くいうある搗よよ
り。生夏を氷の消ざる渭き
妻〜中ひろく　昔ち特の廣
野よ。一村れ森の下宿者ふ
ぴい水受ぴ半ある。定凡所

夜れ狭ようつてぴすぐ〜ふを
野の古寺のぴ。あやし
狩ひぴ泊ぐれば。一人の老婆
雪氷を屋内よたへ〜ふの
翁中模ぴ伯家よい塗雪紅
皇つて薬のゆきあり。翁も

如ばゝ氷を供ぜる
ゝ氷の物の供ぜ
謂を宝ぶ面
ぶられ給ふ可く上
ふ御まゝらして
出ふ仁德天

皇の御宇より大和國つぎの氷
室より奏へ氷の
ゝ其後ふ陰
れもさそで
ゝ拾ふ持
ゝ氷室を
陰も氷室を

風よりつて深谷も忽
へきゝ音風室を氣も
（シテ）便り
あらうてと点も未代長久
乃氷れ俤の為丹波風室ハ
ぶれ都よ氷室をさゞめ中ハ
（ワキ）
り
（ワキ）
宮ゝ箱の中ゞゝ

シテ

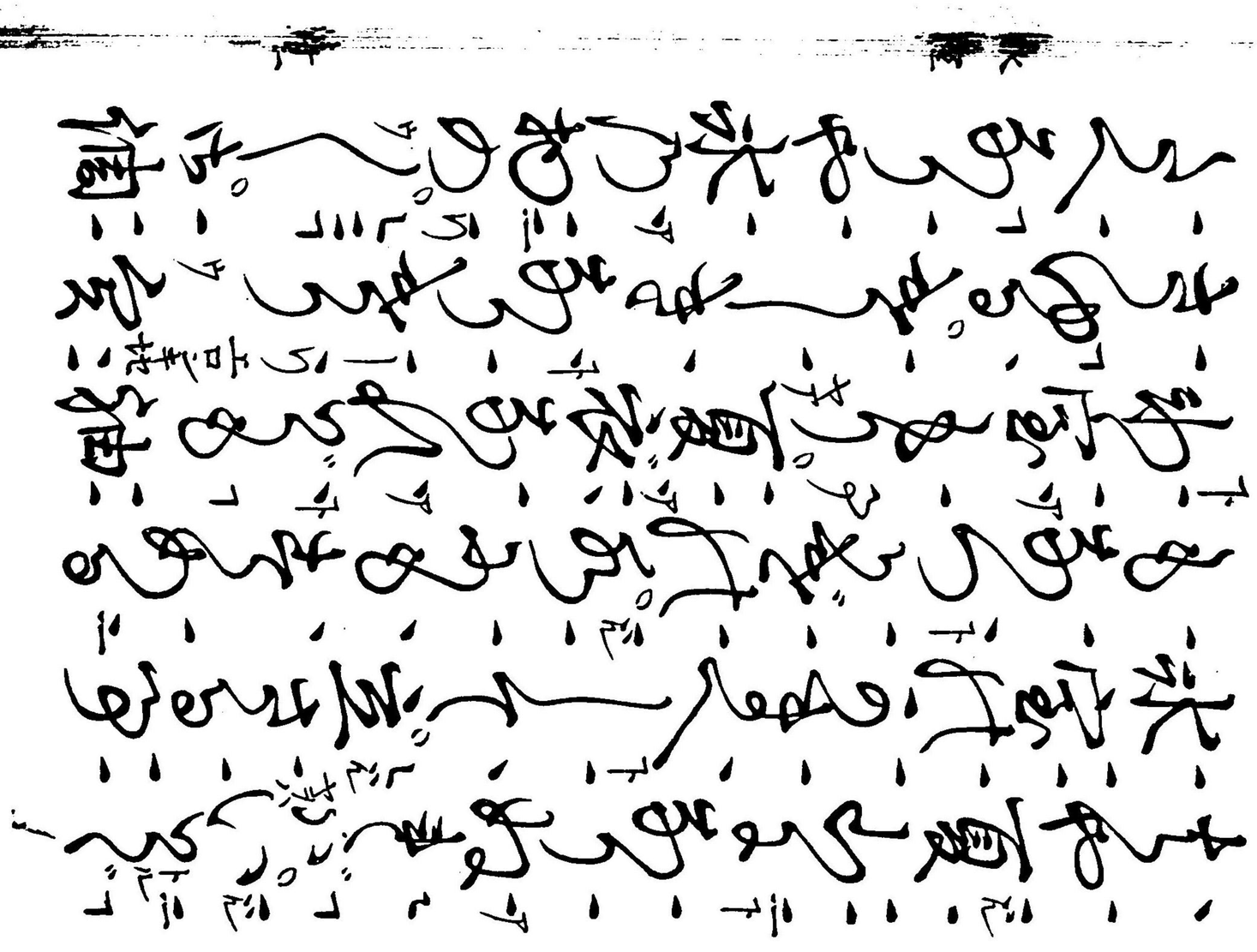
そよの岡みもすそまばゆ
雲立門はハ清るあとさまき
ハ寄みも つゆきゞ 抽
ひゞて。結び
とゝ。春ら
く後と讀ら れぞ。水のまふ

ニ
ニ
ニ

三千余の君ともつゝ重そ
ぶ海萬物はけ出生郎ぶ地乃
恩德まり　唐土まぐ堅
く常恒富迦よさうまり
仏説涅槃経　陽德杉り
つゝみ指ぎり

だぐぐそて雨露霜雪乃時
をゆうり夏乃日ふまるま
できぬ冬氷まうつ門や
ぶぐて空ぐ空へるまや
萬物時ふ有まぐ君のめぐ
けそうへふ都乃外れれふつ

ぐ（二ト）や柴の（二ト）枝ちぐ（二ル）そのも（二ル）
かりちの（ト）ぬ（ア）ぬるあ（ル）ぬつむるゆき（ウ）
れ氷室の（ヤア）山も（ア）まも大君の（ト）
影（ヤア）いでもるべき（ウト）宮城ぐ（ア）
ぬれわぎの（ト）ぬ深世の（ア）数（ウ）ぬるか
ぬ（中）序（キヤ）調（ラウ）ぬ（ラウ）ぬ（ト）ぬ（ト）ぬ（ト



社道も直なるあるべきかな
歸
指を折てゆきかへべ
し中道ゆきつるでなで雪
社水の上の綿ぬ地
消ぬぎよ
みふとぬいつる

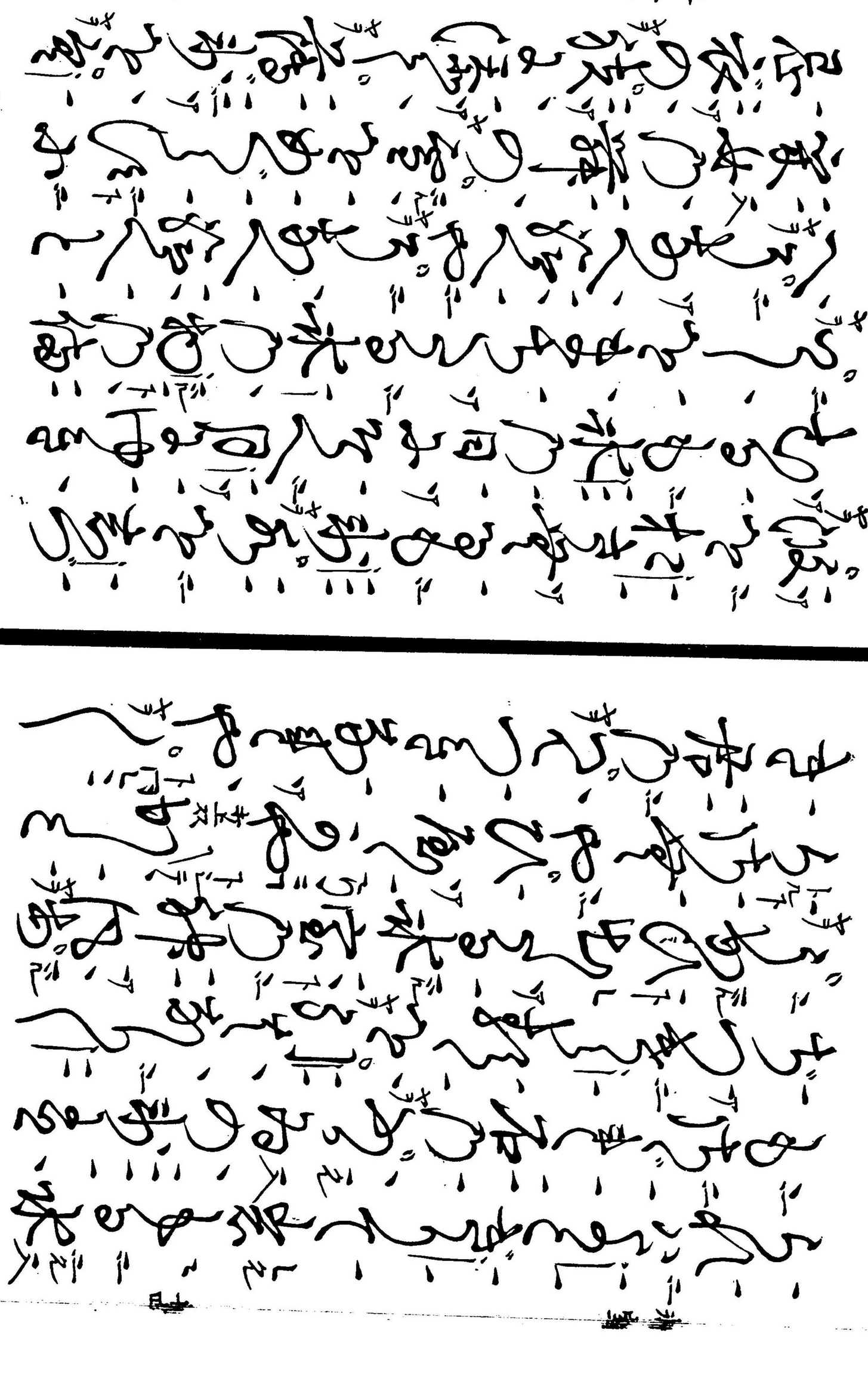
人うつきつねはしめ求
狩の室を守護
おなる狩ぎ
へねぎ
よらるる
りおちぬ河

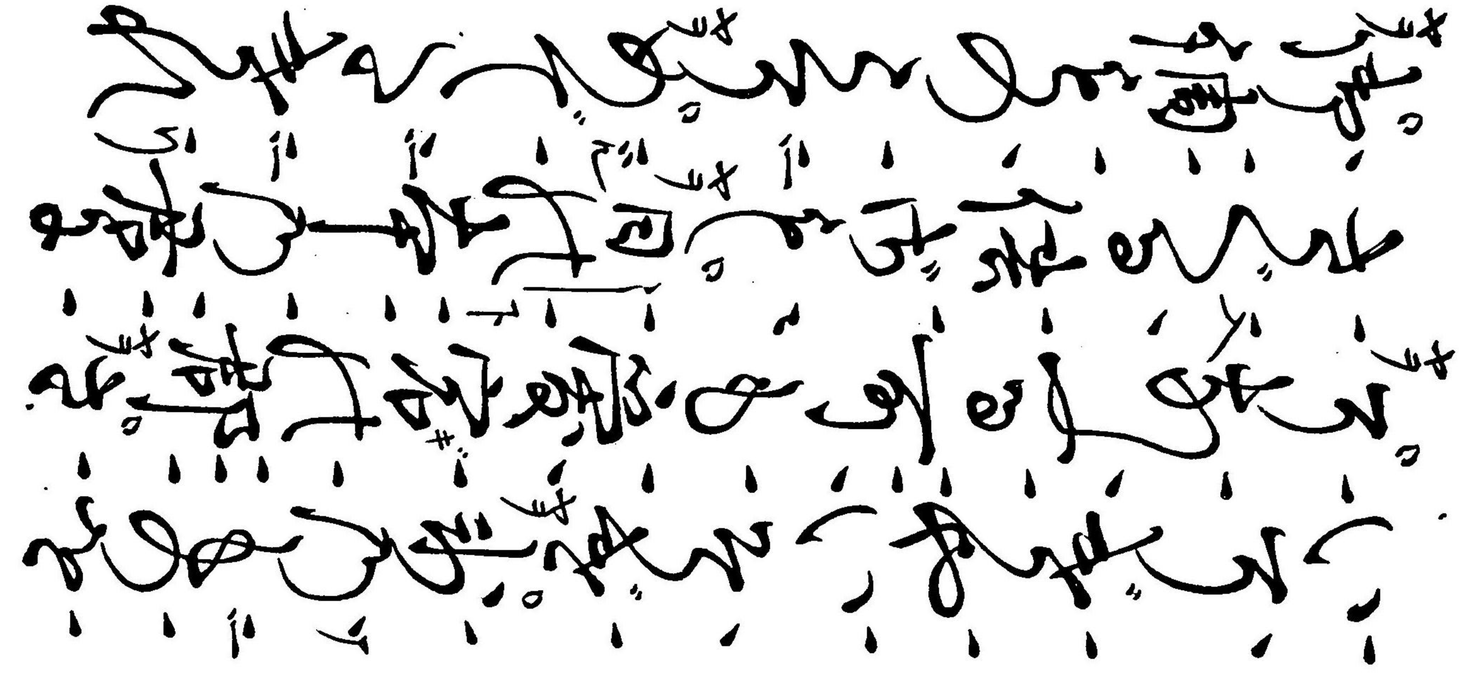
氷を出きて、留まるとよなと思へば氷宝守の蔭氷を
ふ要とくとてもろれらもろ
ひしよきりれ宝のもろもろ
すきり楽よひうまきろま
ろうれ蓮の猫ろゆるど

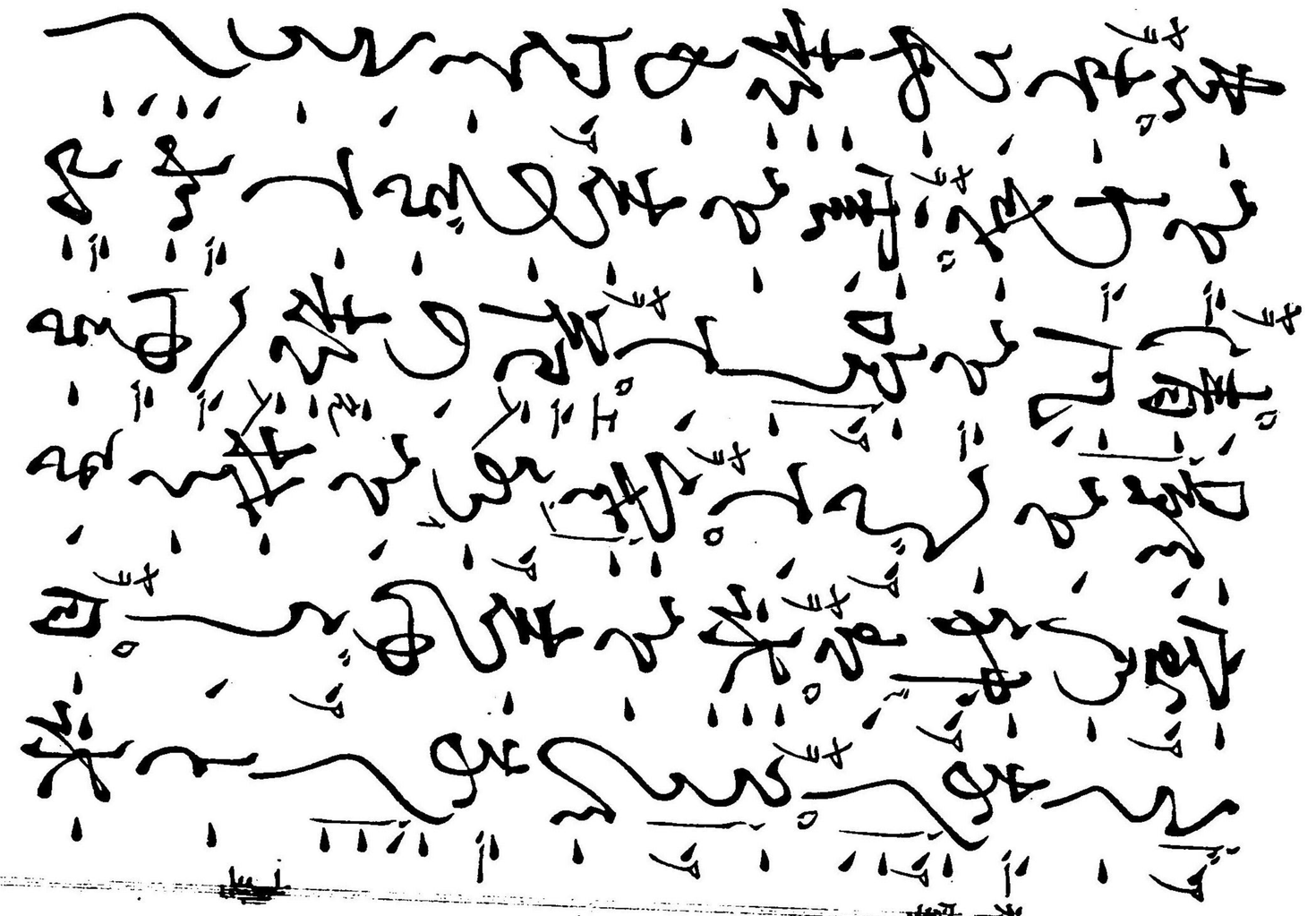
あきぬやれ宝のお
れうしるを宝をめぐ
れ蓮の猫ろまる
ぢ代のきろもあま照れ氷
宝の古猫ろあなりうま
へよれくちもいきぎよきぢん

おそれなく長じてはまた
ぬしもはつうぎをよりて
震動一天地もうごきて
ぬしもはつうふ。防をつゝめて紅
葉大和錦をまとひて氷を載く氷室
の狩衣をやきてゞ見

きけるを合風水島さゝ氷
うらにミ
月もかゝやく氷
の杉もゝ
萬境をうしなひて
鏡のごとく清尾こぎをを
伏せるの陰もとゞまる
よりとよ
雪をまとひあ







善界

善界雲路を去りて椙尾山に
入り給ひ、日乃本を尋ね見給ひ
唐の天竺を首領若界坊
みちびき扶もて我国をうひて首
尋ぬる者龍寺に彼岸に至る

まぐみも慢心の輩（トモガラ）をば皆
我道に導き引きびとしつゝ
あり紙や月光寺に粟散遍地（ゾクサンヘンチ）
の小國あまたび神（ジン）ほとゝ
ぎす法（ホウ）今よさもある由聚及（ジュ）
國に息ぎ月光寺に濃り伝法（ジュ）も

さ海ゝぎびやとなほ石ふ
り村（トル）ふ豊葦原（アシハラ）の國津神（クニツカミ）
び青ゝあ山ぎふ法（ホウ）ゝ
ぎあ海れやぼとの露（ツユ）なま
や秋津島根（アキツシマネ）の羽國（ハクウ）ぎあ
も中（ナカ）ゝ海（ウミ）れ神（カミ）の御國（ミクニ）

一元一一ヿト一一ヲヿ　シテ行

息は猶

ぎ見まつりよりて

見まつりや日本(ヤマト)は地は高てい

ぜて家及びる愛宕山(サン)よりも

こそ方は葉門を中き

ぐやと海作ぎ高かもやあるこ

山(サン)みて書ぎるはみの海水

けてぐもり見くて我がおもも

べきを可みてひくべいふ葉門中

作ツレ天方　行みて濤りひぞ　見(シテ)

いと唐は大物の肩領若冥

方みてひが古同み知り中筑

ぎべきを細りひて見くまで

いるべきまうてはつれば法ハ家及
びきる菩薩ハ坊まうて渡りは
ぷせん某が菴室へ食へ入りくべきて
ろをうを何の為ぞ出すべき
作べ　さ為シテ　ば作今しまる
と人の儀よあべ我ぞよ

をいぶ音ぞ青龍寺般若
堂ぞ至る之ぷも慢心の客
をぶ皆我道ぞ誘引きべと
いとまぷ城や日本國
あまだ神ぞ出てて佛法今
ぞさ為まる由家は四ぷて

心を知り、道(ミチ)を学ばまほしき
は、同じ事ハ、心を本とつゝみて
月他の事を言を達(ツン)して、法
(ツ)を説きやすく、思(オボシ)食(メシ)立る物
ハ、我国ハ天地開闢(カイビヤク)より此
方、世々(ヨヨ)神国(カミクニ)なれば仏

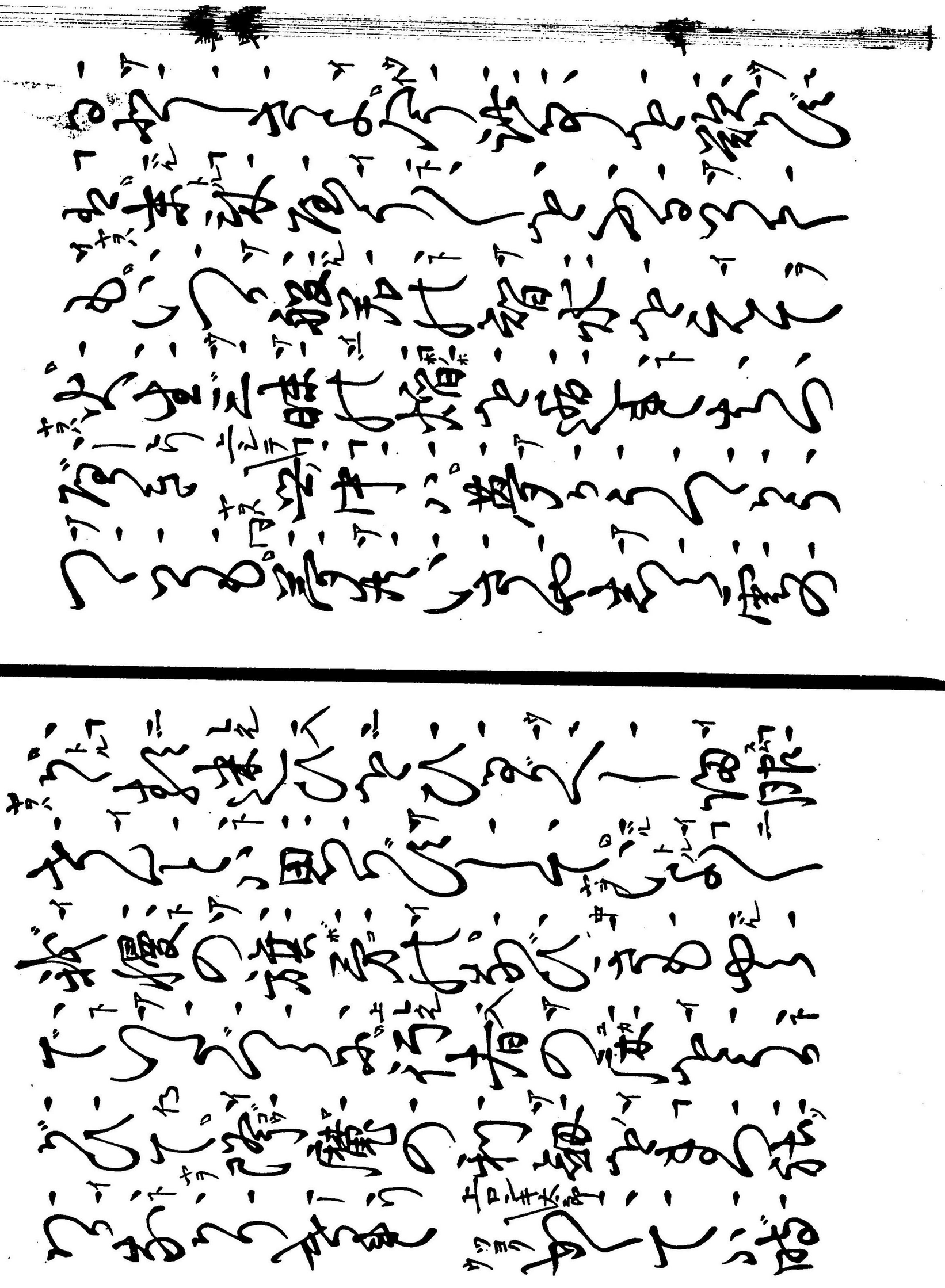
法今よりさかんなり出てまぢ
うきに最おもおもしきあまくそ日本
の天竺おゝ作よ心のますまう
かびおもへ、法(ホウ)もいよ〳〵便
あり、世天竺に仏法ハ、檀家二
教よりも、又密家(ミツケ)の奥義

とつくへ、頭密無学なる可、
なるを、我慢ごとに成れば、
そうして、やまくらくびに
絵ちくる事、上同、蟠踞が斧そや
精神、物思ひよあれば、
ハきれども、ちひさく我慢増

正慢心の便をそなと思よ
も。大自然威力をいよ〳〵業
づつ、ねうり地て、それ明日の
楽物まちくに成とゝへぐもそ、
乃利益よりもよこそ。
火生三昧よりて一切の魔

軍を焼き焼きさうさしかはよい怨
怒の相をぎゝんぎとしいへども
内心は悲しけれども恵凝然ふ動の
姿を顕わす。但し住所に心を
守らず有為きの悲願のれ
ゝとふいへども道を去

やゝで磨境よりまづむ其歌を
思ひ出すとやゝ我ものゝ色を去
きゝの同ようにげ見ればやゝ法
けば其結縁けれ功よりの三悪道
をもものゝ尚も畜生のみを
助けていとゞ欲法欲とされ



新うつまつ　いだしたまふ　ちはやぶる　嶽の山ぶし　べきなり　法はらめいぬ　宮の山ぶしらよ　頼を負て　男る

北上

らつ雲の　かをりも濃か　秋ふかよそよ　高雄山の　東を

北上

久まぶ大びそ　和　接ぎの枝は

ワキ僧上ニテ

清ずり　南よつぐを　ぬ言ば嶽

鷲の山ぶし　雲や震も　吳と共

よ　きよらく　勅をを

秋ふ　松を出る　急ぐも同

じふよふきぶ　大門山ぶ　道か

ら〳〵かくてやうく大比叡
をばうつ行きかつぎやまおも
もみぢくらるさゞり松の梢
の尾根ほうの雲とゐり
雨とゐるかゞ河ぞ水震動し
天よりかくやいおびゐる大地
ひゞく雷ぞ所魂とゝ滝ひ
ぶそもゆけやゝ〳〵
柞見ぞ大唐の大木の首領
善界坊とゝ
〳〵やいふ所坊今更行の
観会ぞ有ぞ出人若作障碍

即有一佛魔境と説りあり痛
りや欲界はかりもよすなり
悟りの道やはなまみ魔道の
ちまたとなりぬ説あぎや
雲のもちよりもの仏法を唱
ふるまきは明すすり魔仏

如すて凡夏不二あり自性清
浮天法ときあきを見を不
動と云付なり聽我伝春
得大智恵ぶもきまま
学所其時虎聲れきより
もの何ぞあられも治べば

雖然、百制多、仏十二天、の
降魔力を合さるべき
れとも、れ、ま
切目結大小掃
ちゝ、凡、東
目揵現、南
松尾小野や賀茂の、凡神
凡仏ちゝ、もみ荒行の
つぎも地獄ちゝもつ
きゆれハ鳥の浪の立さると
てゝ、ゞまゝ、まゝ、さる
みゝも、狐なゝ、きへまる、仏力

狩がゑ(リキ)のまち侯ハ(ヤ)ぬるまゝと
ぬ(キ)ぬきづくりハ(ヤ)雲をよ狩り(ニ)
揮づくり(ニヤ)雲宣(ニ)よのとつ(ゑん)ぬ(キ)
も雲路よ(ニ)ぬ(ニ)きり(ニん)

芭蕉

(ワキ)
見ハ唐士技(レ)風ひらとつぐ(キ)
しいと中可(ヨ)ふ山居(キョ)する僧
みちハ(ゑん)枝も我法華持経の子
ぬれば日(ヤ)長朝ぞ書似(ニ)経を讀
ありぬ(ヤ)ぬ(ニ)今ハ秋もあり

ば同じよひどうとなるを
あるべき事なり
世の中にわまきあるべき人は
もあるいはよのれん讀經のを
りあり唐家（令）にあるべき人の
をもあひ同じいるを使も喜り

てらでいうあるべき者でと名をよ
つねびやと男ひるる昭（サセ）よ夕陽（ヨウ）
西よりつぢ山あり山陰
をもて鳥のよきあるあまそど
き（工寺）夕ぐ門家をもほのぐと
ぐ（ニテ）同よなり（ゆ）陰のまね

くまくまやあちこち
古經を讀て
蕉よ松たて
みやこの秋の
をしく燈きく
くさくさ
まを染の戸よ
月女
芭蕉
松の色
芭蕉窓
秋のすゑ
きゝ
ゆく
あるもの
中
ゆく末
白露の
あれ
ちもそば
正斉
てぬ色の
深きや法の
花ぐ海

めぐりあいてしがてらぶ甚しき
きぬの錦ゆゑもとろもの袖
はよもかきぶ草は狩も露
あらぶるもるる手月を
めぐりめぐれどもの衣
もしの苔も苔

も秋讀補ひまをとたらび
夢うつたわるぎるみ人の月
よみ拾ふもぶ人まる
ますまびぐ昔ハ洗あ
りふまを青るぐさもりひぐ
るを序法をばを花をさぎ

と為て結縁をするにぎりも也
でても法をらてまみるまも
れば仏をら今ふもぐ為り乃ぐ言
乃紫草の露はもちを露れ
まるとはの仏ぐめも結縁よ
かきを給へとく法の結

縁が紙よ物まる序事るれば
ぢうまぐなべるまるざる女
人乃序多みいるでお宿を系
らしべき　女房　其志忘ふさる事
まれば細可べ人ぐ我も又
をぞらぐ寝ぐ法いの

わ[ワキ]ぎもなぐれを波とぐふ、きく
ぬ他生の[女]ちぎりをみよまを
の陰の　樹[ワキニ]　上方
ますおもも[トル]ぬれ露のやどり
ぐ[ニウ]ぬきぼ[ガイ]もふるさの悲
ハ[ヤ]産寺れ[元]ふる波[ヤ]きぬ

もしかゆふ[コイウ]ぐ[イ]ふ[ヤ]ぐ[ア]ふ[ヤ]ぐ[ア]ま[ニ]ま[ア]ま[ア]ま[ア

ちくしてうく　シテ
りりべしぶ　立ばうもくま
と聽ゆきぶ　ぶ雅や仏法経
女人非情草木ぶ　ぶとまの
も頼ちうく　ワキ　ひすで
序話関ぶ　白よく
ぶ信心ぶ　ぶ一会池去

乃信心ぶまぶ　ぶ一切ぶ非情ぶ
木ぶぶぶひすで　ぶ仏ぶ
ぶひぶべき　女　扨ハすぶ
雅やさて　ぶまず成仏の
　　音
しぶぶぶ　ぶ法へ
草ぶ　ぶぶぶて　ぶず

國出家情非情もぶつれ諸
法実相乃
女　ワキ　シテ　二人
乃水音　ツレ　ツレ　シテ　ツレ　シテ　ツレ　シテ

仏国ぞ成
り上ロシキ北
し
ゆうぎ
る女人と文字ふ
らとり白色け
心れ中ふ
ぬぎ色の陶器
仏法をうる分と
もいうぐ男り
法よあひぐを
を麦る分ぐ人界
後月
きやうみも照月の影ハ法なぐ

ら庭の面に雪の降れる蓋の
れつゝきるば海のまゝとをみ
ぜいゝ為〳〵とたゞもへば鐘の
こゑ諸行無常と聞ふ事
〳〵
扨も雪降らもれる
蓋のつゝきる海と聞
ハ紫ひも為〳〵き蓋の女や
為〳〵られきるとゝ為なる
き　作是法のきゞゝと
ゞ思へばいとゞよもきゞ月
も為へ為る法の場所のき蓋や
つきゝ見ん
為〳〵もの

まゝ涙の面やかゝ
ゞ紙や
妙なる法の教よはあらくま
きなるうゞくしきの花まちえ
るを蓮城の中法花の雨もゆ
たなる露はめぐるとくる
み仏人衣の姿中法花をよ

だらうぶりきぬまゝ花
を蓮花露の袖
をまちる庭のもきゝりぎ
のうゞ
猫ゝまねば枕や
もあを松ねのおらりまゝ出る
法をゝまゝばつるゝ人けうぼ

ぞをあらぶ、ぞもあまを古方はいら
成人ぞ（文行ハ）いやんとはさづりや
誠ハ我ハ非情ハきくはを蓋の
女とあらんれ（ワキ）すもや
ぞを我ハ女ぞそはぞはりそる
ふらかるる女（ニョ）狩ぞをばらきき
を狩ぞ（女）其彦ふ審ハ御
あやまり行ちぞめあるる
ねを（ワキハ）もも求（キ）も雨より
ぞる（女）ろれめぐをと麦
あぞ（ワキハ）我とハ生ぬ有情
非情も（女）ぞづるある姿

とまりて　　工奇門

きもたろ、ある
ちるをだにおぼる
ふを蓋の女の衣ふらしをる
花ぞめ物ぬみ猫のほて
ちびもちづりや　　失非情
こゝ又
なまゝといつ。　　然ハ無相真如

猪一農法界心地ひろ
な。雨露霜雪のおもちをと
ひくゝ　　出るる
き。法ひとあらひやゝ
花ひらきて四方はまのごき
き。日影ゝ楊梅桃

書うずくまる

心まで諸国行脚

名所相撲も有

水よりきはまるすず風

をうるおす湯もゆるへる花哉

いまゝまふあとをもきも

ある草とうも様ぐの家

めれ前よれたもとやあ生是

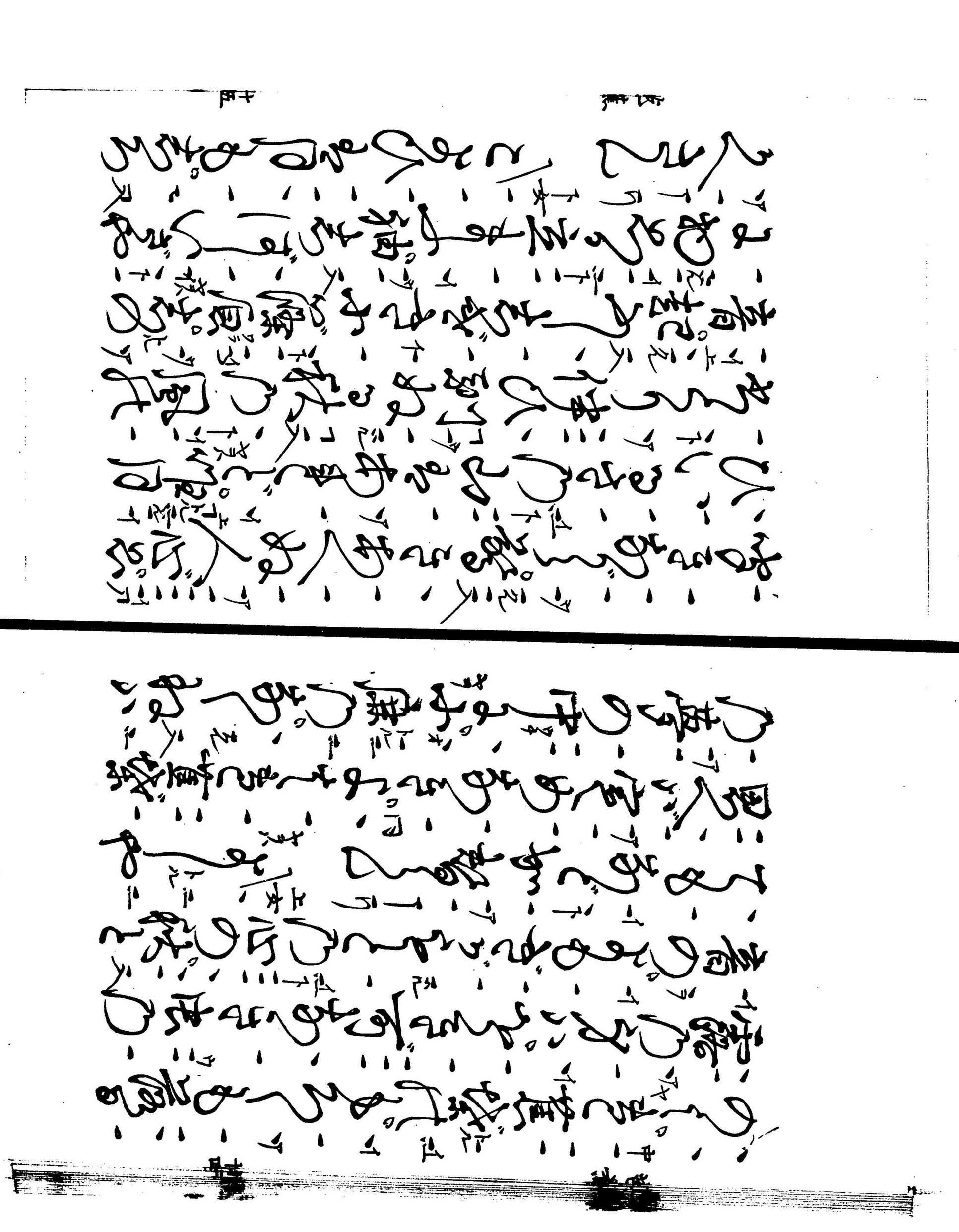
夏ふを秋ふる門の音信を

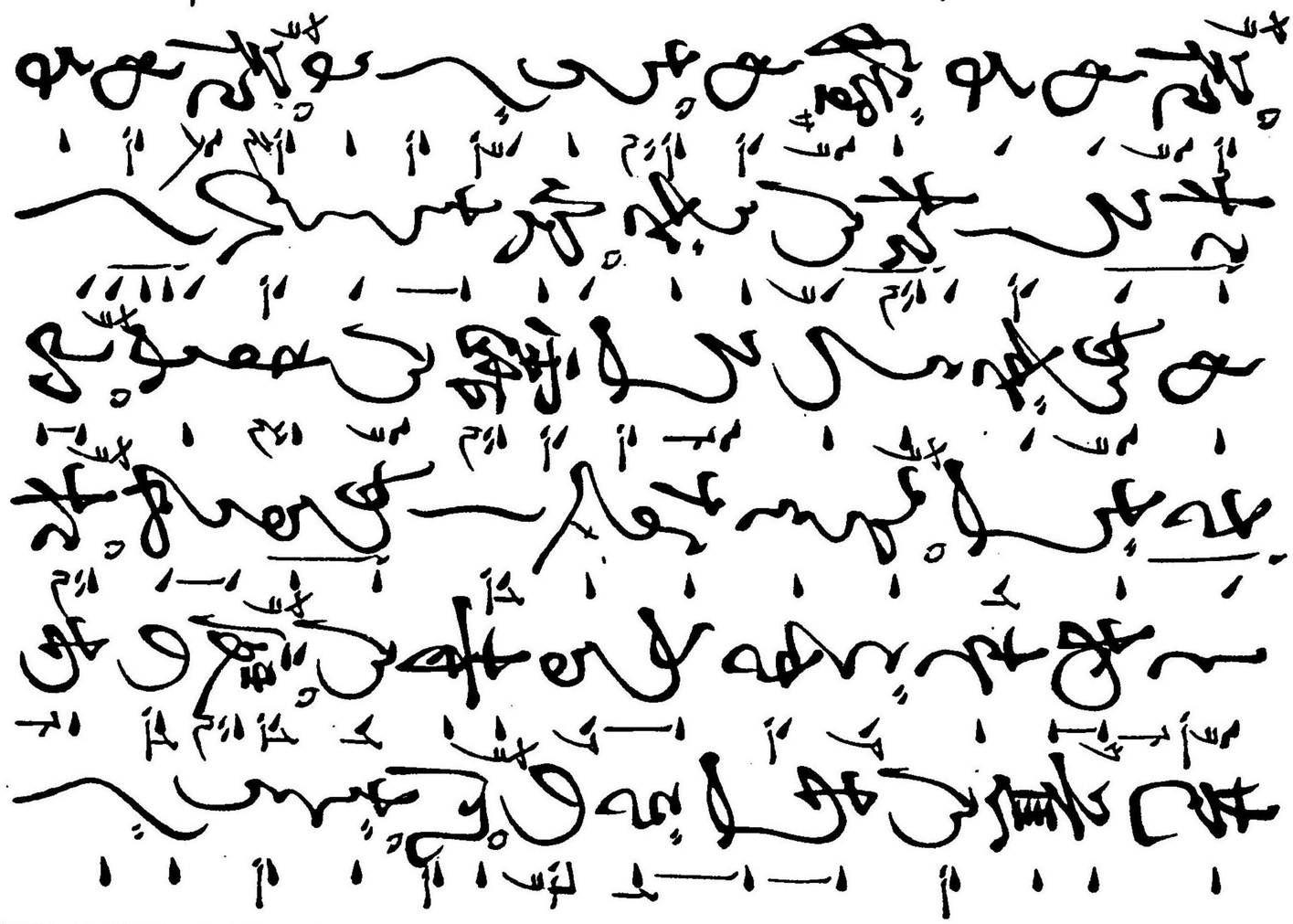
庭れ出ぎりふ出そよぎて

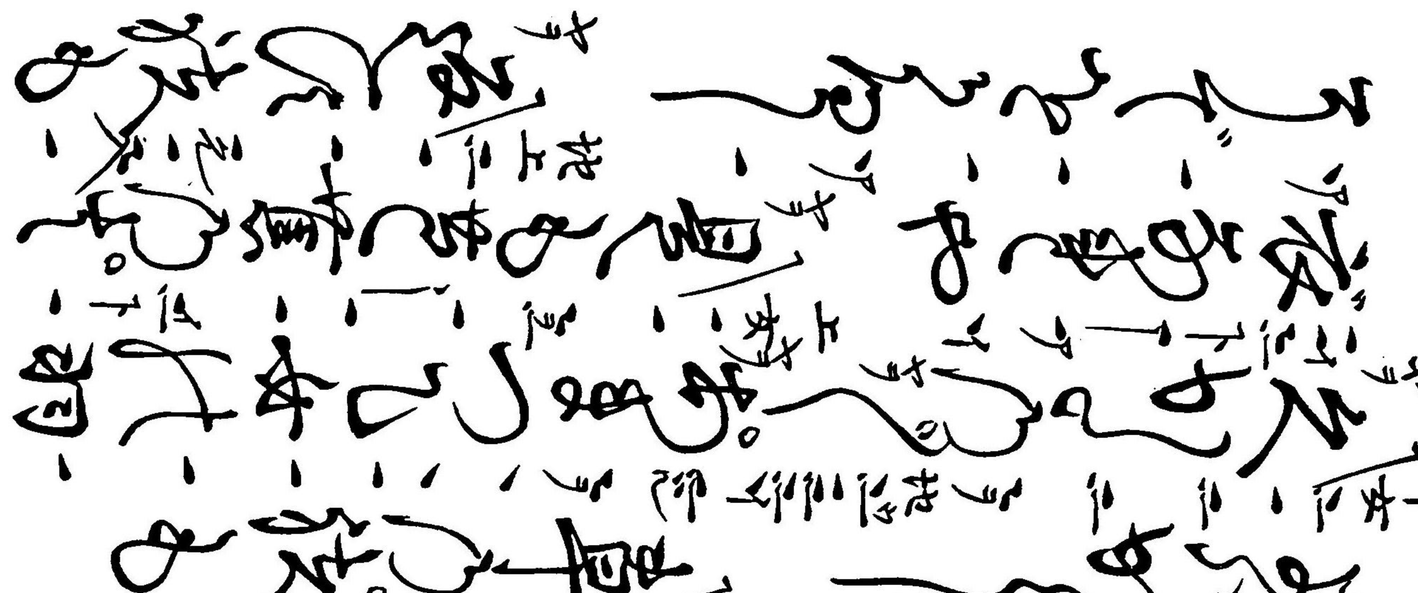
よもまを秋とまひあふ

い古寺の形れ有ずとれ

どいふへもぞ花も見の言ふ







まもる叡ぐ入ぬ
やづまて。ぬ
ぬ
ぬ

いはれば凡夫凡僧の念仏会伝聞するく
狂ふ法おさまれば人をつまもの
念仏聞しまゝぶやとなれば シカく
あゝわるの念仏の相なや俗
ごとふとゝんごとをとるまらべし
南無阿弥陀仏 南無阿弥

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 人ハ
阿弥陀仏 ゝぶ頼む
南無長の月日 南無やゝ雲ちまき
弥ごも西へゆく ゝのゝぶ仏や
あまゝぶと 誰ゝぶ頼まざる
行ゝの念ざゝるべき 見ゝや

雲はれぬれば京師の
ちゝ車よりあるゝ間つも
るも雪の
やうにいさゝえいさと
よ頼むみぶの力頼めや東
南受の法弘
法大師の

のぞやとは道ふまとりて
ぬ程を晴やぬ隙
ばかりまで曇り
めるさふ尚三界は首をやや
はの車はとゝふいづくを
してひるる法えいさゝえいは

ひきやくに　沈車　地　おてあるも
のくまり　ぎふ百萬が姿を
地　牛よりまつぐ　きつ黒髪を　女元　前
棘ばぐく　乱して　地　かりる
ろぼ引ろづ　きつ　女元　眉根黒
き乱墨　地　ろつ　二元　村烏　女元

入れと人ぱぐ　ひもをで　地　思
りぬ人を寄ぬまば　親なの　女元
契りあき夜　地　肩を結んで
きろふちぎ　女元　きろを結び
て肩よりけ　地　もろぎまし
きぐごまれ　女元　ぐまぎ心なぐ

南無釋迦牟尼佛と信心を
いたすも我ごとあらんずるも
ト女
南無やだ釈迦如来我
を合せ和尚もろもろ安穏
を守せ給ひたへ子行いろ中
べきなり行ゲ者ろ

見て成和尚をよく見たへば
ば卵の母みたる中ほそ
まあづ余可ト損ずそよ
て給りたへ見ハるもよ
ぬを家ハ和ハ猫ろ内
ろしまきたるみて作い

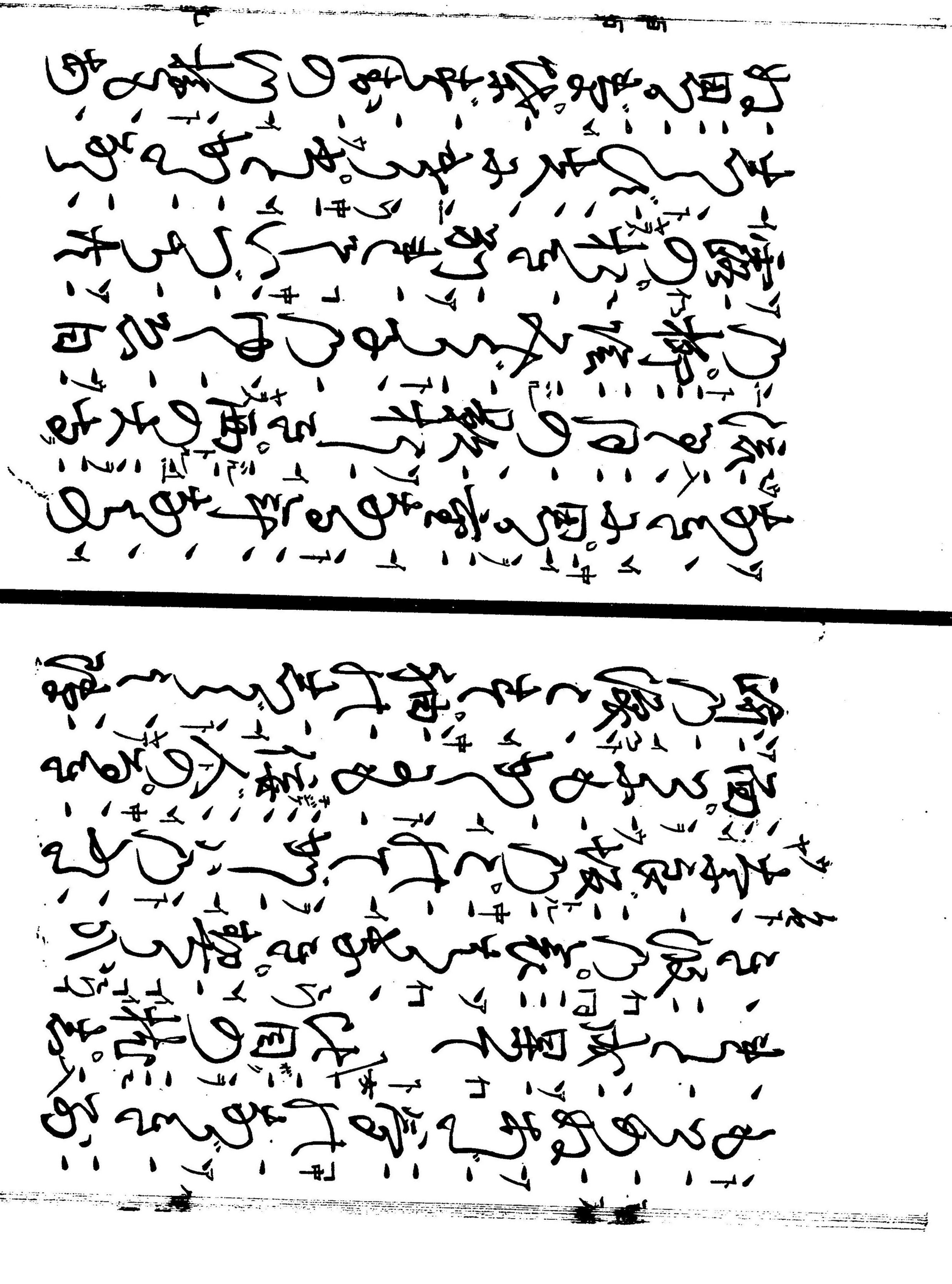
うふ見成程女おとこ郭里（サト）
いづれ者ぞ　女　見しい奈良の
郭よ百万と中（ナカ）去みるは　女（ワキ）そ
まいり行却説（ジン）程人といふ
るぞ　女（ワキ）ぞ（ズマ）よい見てあま
ぶ物（リ）ぞ忘まじ（ジ）開（ビラ）見ひみぐる

よ（キ）まで都まてはは程よ男（ワキ）
ぐ乱まてはは　扨いまもうと
いふ者のあ（ア）ぶ姉（ネ）るべるる
　女　扨もあてそれ却（ヒ）なそ礼
まぜ（ヒ）者（コチ）あ（ア）ぶ人よ面（テ）をきす（ヤンエニ）
も（モシ）若も我（メ）なみ見（グ）やあ（ア）と車

よ法の言葉をたゝへ給ひ
ぶきぶ我なるよ愚とゝいのるも
半ば
ゝ痛りきちすられ伝心
わくくあくパ狂群集れ
ゝゝ、ゝ、ゝ、

とそ鳴へ　文上
ひの猫　秋なの行末いのるせ
宮やまろとらんば行くそても
もめ宿位ぬ時よハ叔卵ぞ
あ世せハそも行くれ寝ぞや
午羊位御よ知くく鳥雀枝の

深きみあ行まする宮せ平ハあ
浪のよるへを位行くを水のタれ
果いふあれ紫の精の露の
吉卵よ　を平月を送り
しふ月も二せとあをあ
ぬぬぬぬ来ハ花ぬぬ結び



とよりて。崇徳、都を立ちて、
讃岐へ。さぼりのとりもち
実
河内へ。笠山へ。
濃へ。
下
城へ。
仁
よりて。敦賀へ。面
下
あちこちのこしの
下
敦賀より海へ。
下
て月日を送る。
下
あり。羊はあり。

ひまの、鶴へ。
下
ふ。仏へ。
下
ひまの、鶴へ。
下
狐へ。
下
の西へ。
下
すつる。
下
嵯峨へ。
下
の寺へ。
下
まつる。
下
四方へ。
下
氣へ。
上
を詠へ。
下
花へ。
上
を詠へ。
下
亀へ。
下
やぶへ。
下
まつる。
元
大井へ。
元
仏へ。
元
ふ。
元
ふ。
元
ふ。
元
ふ。
元
威へ。
元
行へ。

ぶ桜井のわぎを松の尾の倉の
里にたち霞立らそつぎの忘
の袖かざしぞ多き花ぐらも
貴賤群集きる法華寺の法ぞ
うつろふをわきまとうもられすり
も唯法華寺で食稲を如ぐき
あくもわまをかみ中ハ荒れな
きたに二伝れ中間秋くきの
迷ひある道の道のきあるで
て畏首羯磨ぐつ赤
梅檀の宮やぐ仏を現
ぐて天竺震旦我朝三国を渡

り当麻も沈青よりはじめ給ひ
安居の古法とゆもの母摩耶
ぜ人の春浪はれ古るまもばか
も古母をおもひ給ふ道ぞら
しの俗や人間の分ってあら
ば母をおしまぬとなを恨む分

をかとちの感歌ぞ初りきる
新なあり世の猶あまや百萬
ぐ年を見給へ我が宮
や見狂ふき人の子ふまで
夜我なれるを給へ我が宮
しや吾なるべ南無釈迦牟

尼ぜと。相べあぐ。もなもなを
と信心かあきと。南無阿弥陀
仏。南無釈迦牟尼仏南無阿
弥陀仏と。心あぐも。逆縁あ
らひよあハきとゆ。ゆ。
あまりふみるも痛りや。尼ぜ

松ての寿ぬるよ。能くすて
只祈へそよ。心づよや。や。
みもろ等祈よあぶかふふ
きぢとぶちきて。初と。音報
しやハ男へぐも。面くなハ
優曇花ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。

十三終

めの現りまばゝろ〻ウ紙くまのを
葉ぎるふの〻ア彼御幸ぞ給ふもと
すりもぞ給ぎれ〻父るまぎ〻母
法たふ只りあ〻法の力ぞ者ぎ孫
き。殿へもら〻り車路を。起み
向る時、ちりよ〻

和泉慶
今日男へ〻ら〻紙衣〻〻帰
路をいつと宮めぞ加授る
ひ春ハ西塔の傍る住居さる
武義坊弁慶みてゆきても
我君判官殿ハ頼朋の御代

宮ゝて平家をたぼす給ひ
御兄(ゴキヤウダイ)兄弟共に中日(倉合)月のごとく
世界にべきとぞゆひうひうるきも
の讒言(ザンゲン)によりて中ゝなぐられ
ゆるすべきもの口惜き次第ふ
ていは独もだ我君親兄(シンキヤウ)の孔

を打ちんじ給ふ。一まつ都を
出(ン)ぬきあつて(ヌ)西国の方へ御(ン)
ぶ向あつぶ分るあやまりまるき
通りを古歌きるべき為ふ今(ン)
日北をとめ浦より出船日き
津の国尼ヶ崎犬物(イ)の浦へと

意作

サミ立宗ハ文治の初めつ
ふ頼朝義経不和の由聞ま
落給ひ力なく判官都を
書ものの道さぞ哀まぬ
きふ西国の方へと心ざ（立花円）ま
だ浅深も雲井の月ぞ
惜き都の名残せ年家
迫付の都出よ引へ
十余人ぞ
知ぬ
世平ハ人を
上方
ヤウ

ぞ濯（トル）を（元又ニ）、神（ツ）で（ツ）吉（ツ）る（ツ）流（ツ）
と（ツ）ぞ（ツ）う（ツ）き（ツ）み（ツ）ら（ツ）ぎ（ツ）を（ツ）と（ツ）め（ツ）て（ツ）あ（ツ）く（ツ）
行（元ア）が（ツ）狩（ツ）す（ツ）る（ツ）に（ツ）、（元又ニ）根（ツ）心（ツ）湖（ツ）も（ツ）浪（ツ）も（ツ）と（ツ）
（ウ）（ツ）（イ）（ツ）（ツ）（ツ

まち迄御供申してはぢ宿を申
くへ（犯ヵ）ちくぶの奥のまゝ御通
りなへぢ用心の外に法心や
きくへ（ワキ）いろ中
ゝ田ちまきはく
ゝ恐れ多き中ゝ御ゝくへ
だ西ゝ静なる山供と見え

申てはぢ今は折節行とやらん
似合ぬ程よぢ座くぢ天晴（晴カ）
見より出くへ
なる（判官）ゝも（ワキ）ゝ
らひはく（ワキ）長（ワキ）はぢさくぶ静
の山宿へ来て申べいふ

屋の内ハ静かれ濃りとか君よ
りれ御使ハ武義ごまぢらは
むさ殿とハ長男るよりびや
行ひるめれ古使ハ子ぢう
ムぐるハ今と事る事よれぢよ
あびぢ我君の御諚よハぢるし

迄ハ古と事ぢ事ぢも弾ぬよ男
石伴去あぢ御今ハ何とも
後仰合ぬ様よ屋ぢくバ是
より新へ御問あれぢの古字
みてハ　男ハ男るもぢるぬ
伝武行ぢ迄も古侍と伝ぢる

ふ頼(ヨロコビ)てもあるべきハ乃(ワキ)
心おり(イカ中ニ)ハ長(ヲサ)ハ(ヲ)ハ(ヲ)ハ(ヲ

の古事をみるに　判官　いふ静ぶし
度思ひびも高へと（ヲチウド）あり落（チ）
る所よ思ふ点を論じて来る志
をもびくもきたるあり
をあぐるに波（トウ）清を志
のぎりしを思るべしと

世代度ハ都よりノボ時節（ヲリ）を彼
ふく　扱（シテ）も伏よ我君の古徳
みちぐやよりまち武義殿
を報ゆるまれまぐりき
よをもぐ（トヤセ）ニニニ（ニニニ）ニニ面目あらそ
ざこ（ワキヲ）ふく　いやく見ハ若あり

心を思ひ乱るる
替るとは
なれば
そと涙
を流す中を
しやうる角
と取なぬ
なれば
上京して海路門出する
浪風も
静を留め給ふ

二りくに
うとうく涙をながしつゝ
の神に祈て
もの宮めも
りまして
中ニアイ
二度参ら
いふ弁慶
判官

惜き命ハ君よ
ぞ思ふ行末
酒をすめ

へ　長てゆ。ゞく見ハ出門出乃
行まゝ代ゞく菊ゝ盃弥よ祝
ゞまゝめきれ　妾ゝ君の声
ゞ多ゞやる方ゝあゞきふゞかきくれ
て濃ゞもきゞよ計ゞあり　い
やゝくられゝ苦ゝのゝね。根の

多路の門出乃和尚哉一句
とゝくもきゞば　其時静ハ立
ゞ時の調ゞ
口の部船ハ門静ゝまゝ又ゞ渡
波頭代漕可ゝ日晴ゝ
見ゝ乃ゞ代ゞ代ゞ

立てまつべくもあらぬ身に猶
うちつるも恥りしやこれ侍ぬ陶
業云ハ勾踐と
じよ蘇り勾
をめぐし縱よ呉王を
て勾踐の幸言をうつさ

如何結ふ勾踐か二度よを
うり會稽の恥をきよぐし
も陶朱功をあきらかにも
ハ却つてはかみうとす
をみは任を切名うる者
心つくるべきを切なる

名ごりをしみ給ひて
八月十五夜
道と心をつくし給ふ
五湖の者潟を乗もの
根もなき舟の月のうらやましく
かつ捨給ふ西海の波清き
中なれ科のあきをよそに
歌

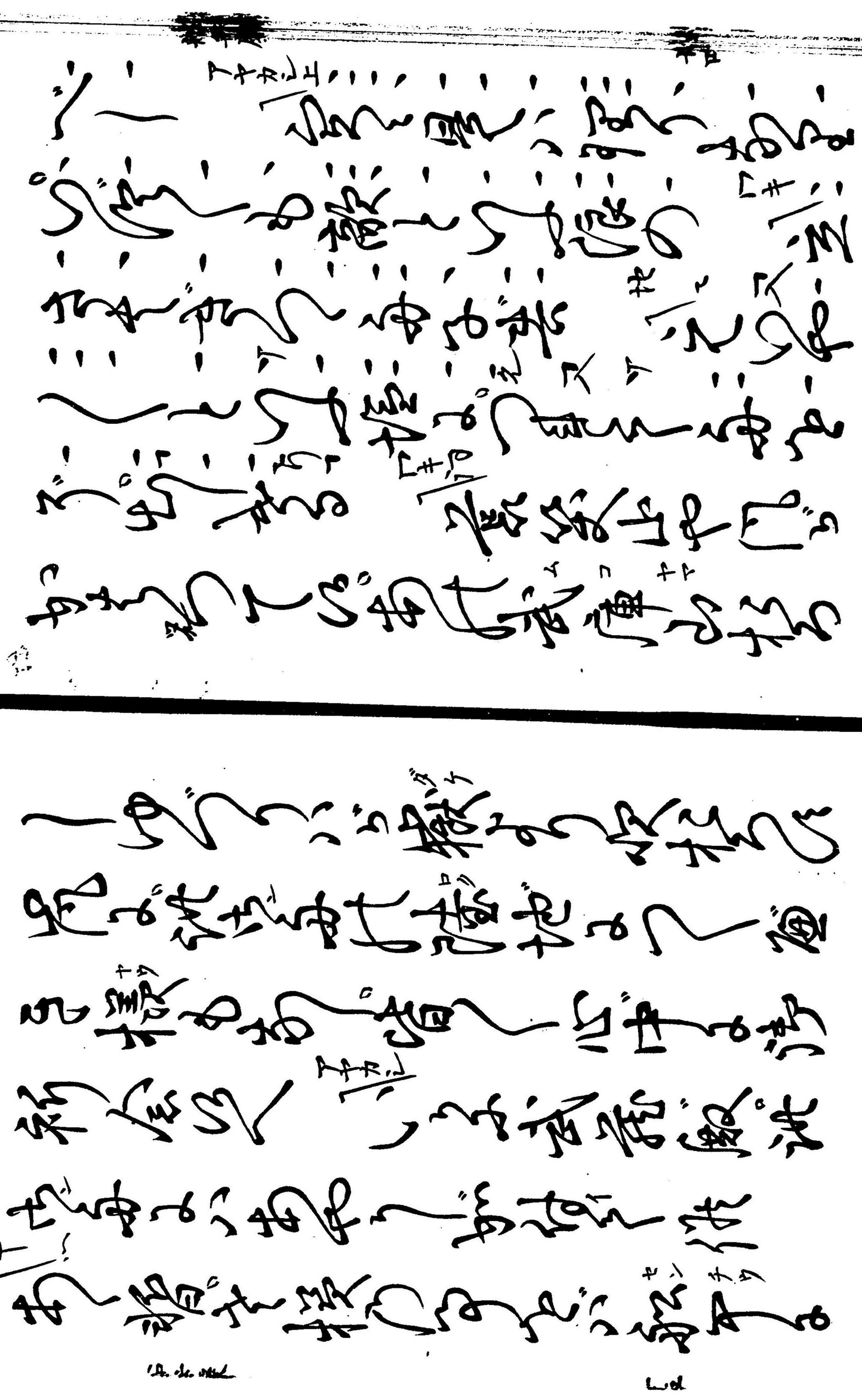
きぬぎぬ
きぬぎぬ頼朝も袖をしぼり給ふ
青柳の枝をつぬる古契
ぞうらめしき
袖頼
絶
絶えぬ頼めぬ
ぬ
秋世中よ
ぬ
ぬ
ぬ

まくはの神くるる孫のいつりすく
はの頼て古代なる世あの船なぶ
ぎやるもづ事をやくくとそ
やるもぶかをやくくとぞく
めゆをば判官も様の宿りを
出給へば静はあくるぞほ

直事ぬぎ捨て涙よもぶ
古別まびるめるも流れ涙
くく
持の心伊宮寺
はぶ物御母を出さまるる
るはいらて中作仕ぶ
るぞ君よりけば宿なを

ぶねは浪間あゆみ行く狂ほ波道
笛と伝出されて作と行と
波道笛とぶや さんば是
を相量中ふ静よろ紙を南
情ありて波道笛とぶなんぜ
波思業なるぶ波法ぶ法法

多みて如捨乃事ハ波運もつ
きるとなるば是工一年波辺
福鳥を出ハ時ハ波外れ大凡
成ぶ君ちを出ぶ手家を
てぶ行ぶ今もつて同
じ今ぞ如 悪ぶちを出ぶ



くハ中さぬ事みるくハ上ヒニ出ル
ぶ〻ぎや海上をられぞ西國
みそてびゝ年家の一門ぞの
〻〻海ひ出るぞやのる時尊
を伊ひるの恨をあくも知ること
判官
いる矢慶　前よハ　判官　今文

弱くべうくびくびくひ悪霊服を
あひたくも行ずれるべうぞ
悪手〻首〻の其つとり弾指
伝説の冥感ある者天命を去
づら平氏の一類　自上を拓
めり一門ぞ弾雲飛ぞ

ろくろくひてみくらるるぞや
はしりてはしりまはりこそ
柏原八幡武天皇九代の孫亂
逆の霊あり蒼野や
年の元威出雲
いふ義経男ひもすぬぐ
浪の
きをぬぐよもの
上ヤ
上ヤ
上ヤ

ツ、ちらぐ、うち和指物うつ乃
人、なもすぐ、ぐ言葉をもて
戦給へば、弁慶、陽てうち
物わぎみ、ぐ、ちまと、ねば珠
きく、と、押もんぐ、東方陽を
せ南方軍化利夜又西方ぐ威

德ぬ方人全剛夜又明ぬ中央ぐ
西ぐ不動明ぬ、ぐ、ぐみりきて
狐ぬ、しの、ぐ、ぐ悪霊ぐ祟り
きぐ、れば、弁慶、家毎ぬ力を
合せ、ぐ、松を、漕のきみぐはぬ
ずしまば、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ

255
92

版權所有

明治四十年九月廿五日　印刷
同　四十年九月三十日　發行

東京市牛込區新小川町二丁目十番地
印刷正者　觀世清廉（電話番町三百十六番）
京都市二条通麩屋町角十二番戸
發行兼印刷者　檜常之助（特電話三百九十番）（振替貯金三五五貳）